

第三回 民博若手研究会 記録

実施日時：2012年7月29日（日） 午前11時から4時45分

場所：第7セミナー室

出席者：足立、飯島、市川、大川、奈倉、山田

ゲストスピーカー：松浦

記録：奈倉

1. 発表者1：松浦雄介（熊本大学）

タイトル：アルキの「帰還」とフランスのポスト植民地主義

【内容】

本発表は、アルキの記憶をめぐり、彼らとフランス国民国家との関連について考察するものであった。

アルキとは、アルジェリア独立戦争の際、フランス軍に補充部隊として従軍した現地のイスラム教徒住民で、戦争終結後、本国に「帰還」した人々のことである。ここで「帰還」としたが、フランスは故地ではなく、血縁のつながりはないことや、アルキのフランス本国移住は、半ば強いられたものであり、いかなる意味でも「帰還」（「引揚げ」）ではなく、むしろ「亡命」の方が適当であるゆえに、彼らが「帰還者/引揚者」というカテゴリーを自称として用いることはないが、にもかかわらず、フランスの法的・行政的・法的枠組みの中ではそのカテゴリーが適用される。

アルキは宗主国のフランス側に付いて戦ったことから、「裏切り者」とみなされるが、当時、当事者に対するインタビューなどを参考に、彼らの立場からみると、宗主国対被植民地の構造における被害者意識や、「アルジェリア国民」という意識が希薄であったことから、同胞を敵とみなして戦ったという自覚がなかった。このことは、彼らの故郷認識とも関わる。当時の彼らにとって国家はフランスのみで、アルジェリアという国家の認識や記憶はなく、あるのはFLN（民族解放戦線）の存在のみであった。彼らがアルジェリアについて語ることはあまりない。戦中・戦後のアルジェリアでの辛い記憶や、従軍経験の辛さ、今もなお続くアルジェリアからの敵視のためである。このような状況のなかで、アルジェリアは彼らの「故郷」となりうるのだろうか。

1990年代に入り、フランス政府がアルジェリア戦争の歴史と向き合い、それをナショナルヒストリーのなかに位置付けていこうとするのを背景に、アルキを可視化・記憶化し、アルキがフランスに貢献した歴史を創造し、国家としてその存在を承認していく動きが現れるようになった。フランスによるアルキの記念事業が度々なされるようになる。2005年には「フランス人引揚者にたいする国家の感謝（承認）と国民の負担にかんする法律」というアルキに関する法律が制定された。

アルキはフランス国家に自分たちの犠牲に対する責任を認めさせ、フランス社会に自分

たちの居場所を確保するためには、「フランス人」として自分たちを提示し続けなければならない。

【主なコメント・質疑応答】

- ・「引揚げ」と「帰還」の概念について。アルキを「引揚げ」と見なす妥当性があるのか？
- ・生きられたアイデンティティとしては使わない。政府に対しては引揚者というカテゴリーのなかで語る。行政用語・法律用語としてのアイデンティティと当事者のアイデンティティは別。
- ・移民は自発的移動を意味する傾向にあるが、アルキは強制的移住。当事者は自身を「アルキ」と表現する。
- ・90年代からアルキが記憶化される背景。⇒2002年にアルジェリア戦争40周年を迎えた。それまでアルジェリア戦争はタブーなテーマだったが、戦争総括、フランスの過去との和解の空気がアルキの議論も生み出した。しかし記憶の形はみつけにくい。2005年の法律にも現れている。
- ・フランス植民地の中では原住民は？アラブ系？ベルベル系？区別されていなかった。アルキはベルベルに顕著？どちらもいる？⇒アルキの中の民族構成の比率は不明だが、とくにベルベル系の現象ではない。アルキという言葉が定着する前はしばしば「イスラム教徒」として括られた。
- ・民族性を出すときに「アラブ」という言葉を使わないのか？主張しないのか？
⇒アルキはアラブ、ベルベル文化よりもフランス文化・社会にコミットしている。語りレベルでは「フランス人」として提示する。「なんでここにいるの？」という問いかけにはフランスへの犠牲の歴史を語ることで説明。フランス人として自己提示しないと居場所がなくなってしまう。フランス人的であることを見せようとする。アルジェリアを故郷としてノルタルジックに語ることは難しい。アルジェリアに対する沈黙。当事者が故郷を語らない。ただし実際にヴァカンスでアルジェリアの親族を訪問する人は少なくない。言説レベルと実践レベルの乖離。
 - ・フランス国家から功労者として認められたいという心情と、フランス国家の無策による犠牲者として政府に責任追及したいという心情との両面が、同じ一人のアルキのなかにある。
- ・発表資料のなかに「引揚げ」の語が頻出するが、日本語の訳語を意識されているのか？
どういう基準で使用しているのか？「ラパトリエ」は軍人と民間の区別はないのか？⇒ラパトリエは補償のための用語。なぜ「帰還」じゃなくて「引揚げ」か、というと、行政用語だから。実際にそれが存在しているから。植民地からの人の移動を表す用語。戦争の歴史と関わる。語りでは「強制送還」。政府、研究者、当事者の複数レベルがある。
- ・アルジェリアの虐殺とは？⇒アラブ、ベルベル系の人々がアルキに対して行った暴力行為。
- ・虐殺をした主体のほうか FLN（「民族解放戦線」、アルジェリア側）だとしたら、FLNに

たいして責任追及するのでは？⇒フランス側についてしまったことにたいする「恥」の感覚や、責任を訴えてもアルジェリア政府に届くことはないという思いから、なされることはない。⇒どこかでアルジェリアを故郷と思っているので、悪く言えないのか？フランスは自分たちと違うので責任追及しやすい？⇒現在のアルジェリアの政治状況に対して批判する人も少なくないが、かつての虐殺に対しては批判しない。フランス側に就いたのは事実だから、アルジェリア人を説得することはできないのでは。

3. 発表者2：足立綾（東京大学）

タイトル：ピエ・ノワールの「帰還」と「故郷」

【内容】

本発表は、ピエ・ノワールが生まれる歴史的背景を踏まえ、2つの角度から考察を行った。

まず、ピエ・ノワールは「帰還」移民か、という問いを立て、フランスで用いられている公称の「ラパトリエ（帰国者/帰還者）」の公的な定義を整理するとともに、当事者に対する聞き取りや口述史を通して、彼らがそれをどう受け止めているかということについて当事者の立場に立った分析を行った。公的な定義（1961年5月7日）によると、「ラパトリエ」は「彼らの定住先であり、以前はフランス主権の下に置かれていた仏領、保護領あるいは信託統治領を、政治的諸事件により退去しなければならないならなかった、海外のフランス人」とあり、つまりここにおいてピエ・ノワールは「フランス人」とみなされている。これには援助の対象者として定める必要があったという背景もある。しかし、当事者の声からは、「ルーツ」がフランス本国にないこと、内地内の移動であったという主張（アルジェリアの特殊性。植民地ではなくフランスの一部であったことから）、「帰国」ではなく「脱出」、「亡命」と捉えられている場合もあること、の理由により、自身を「ラパトリエ」に位置付けることへの違和感がみられる。

もう1つは、ピエ・ノワールたちがフランスをどう捉えているかということ、および文化的アイデンティティの視座から、彼らの故郷認識について考察した。ピエ・ノワールが「フランス人」という認識をもっているかということについて、インタビュー結果及び口述史の分析からは、「ナショナリティとしてのフランス人」、「『フランスの』アルジェリアで生まれたフランス人」、「フランス本国人とは違うがフランス人」という曖昧さやフランス人と差異化する気持ちをみることができる。また、フランス本国において、習慣や人づきあいの違いから、そこは自分の「国」だが、自分の「場所」ではないという感覚や、どこにも属していないという「デラシネ」（根なし草）感覚をもっていることがわかった。

こうした故郷の喪失感を背景に、1970年代からピエ・ノワールがその名を積極的に名乗り、「ピエ・ノワールアイデンティティ」を志向する動きが起こっている。第二世代組織の発足と活動、そこでの「ピエ・ノワール文化」の創出・共有である。これらの現象は、「フランス人でもなくアルジェリア人でもない」という状況を「フランス人でもあり様々なヨーロッパ諸国出身の人々であり、かつてはアルジェリア人であった」というポジティブな

ものと変化させることでもあり、さらに、空間的な「故郷」の存在を確認できない彼らにとっての「時間の中に存在する故郷」の創出につながるものである。但し、発表者の調査体験からは、こういった「ピエ・ノワール文化」とは、個々人のレベルで「実践」されているものではないと判断できることから、それは「実践」としての文化ではなく、「参照地点」としての文化、と捉えうる位置づけとなる。

【主なコメント・質疑応答】

- ・以前、ジャン・レノーが朝日新聞で取りあげられていた。記者が「ピエ・ノワールについてどう思う？」と聞いたら顔色が変わったそうだ。
- ・「ピエ・ノワールアイデンティティ」の両義性について。普通のフランス人と「フランス人」を差異化していることに驚いた。私（松浦）のインタビューでは「フランス人とは違う」ことを否定したケースが多く、それは引揚体験が消えてしまうという理由から。
- ・アルキと違う。故郷へのノスタルジアを語れるところがピエ・ノワールはある。
- ・何か属性的な違いがあるのか？こういう人はフランス人を強調し、こういう人は非フランス人を強調する？階層や地位で傾向があるのか？
⇒集会にくる人はPNを強調する人。活動しない人のほうが多い。フランス系（親戚にフランス系がいる）の人とスペイン、イタリア系とは相違がありそう。スペイン、イタリア系の方が感情的、ノルタルジック。フランス系は理性的にみている（政府の対応への評価など）。
- ・引揚げの時点で、フランス市民権をもっていなかったスペイン人などの国籍問題はどうなっていたのか？⇒フランスには一時的な滞在しかできなかった。
- ・ユダヤ人の問題。ピエ・ノワールのなかでもユダヤ系の人々は独自の存在。現在ユダヤ人はどのような位置づけか？他のピエ・ノワールからユダヤ人は煙たがられている？⇒ストラー（歴史家）などはその歴史家としての立場や考え方から煙たがられているが、それが特にユダヤ性によるものとしては捉えられていないと考えられる。
- ・「ピエ・ノワール」の定義について、モロッコがはいる場合もある。
- ・「記憶の場」の設置について。2005年の法律によって教科書などの記録に変化が見られるのか？2006年の4条削除で何か変化があるのか？自分たちをナショナルヒストリーの中に位置づける。⇒特にみられない。今年がアルジェリア独立50周年にあたるため、ピエ・ノワール諸団体の活動が活発化している。委員会（アルジェリア戦争をオフィシャルな記録にしたいという研究会）を組織した。でも反対意見も多くうまくいかなかった。
- ・入植者について。本人たちは入植するという意識があったのか？⇒入植意識はなかったと思う。政府の後付で「文明化」。
- ・19Cには北米にも多くが移住しているが、アルジェリアへいくのか、別にとこへ行くのかということには何か理由があったのか？
⇒実際は北米が多かったのでは？スペイン、イタリアからは完全移民になるが、アルジ

- エリアは国内移動。常に人が行き来していた。外国としては捉えられていなかった。
- ・送金は？⇒出稼ぎ的な要素はない。
 - ・歴史的（国家的）差別と社会的差別。⇒アルベルカミュがいったこと。「ギルティ」。
植民地主義とアルジェリア戦争の責任。
 - ・例えば「ピエ・ノワール（スペイン系の母、イタリア系の父）」と書かれていることからわかるように、「ピエ・ノワール」とは、混血、まじりあったもの、という意味で捉えられる傾向もある。
 - ・「引揚げ」は日本でも蔑称？⇒南洋帰り、海外帰り（貧しい、お荷物。）状況によって差別的にもなる。
 - ・「集合的記憶」の代弁者として声を発している人もいる。
 - ・「ラパトリエ」の定義と当事者の捉え方の違い。
 - ・ピエ・ノワールは「帰還移民」か？⇒括弧をつけることによって、「帰還とされた」といえるのではないか？括弧をつけることによって過去がないものにされていくのではなく、記憶を強調していくという議論につながっていく

おわりに

- ・宗主国と植民地の人々の関係性。
- ・「引揚者」という概念の分析の必要性。